

Title	リカアドウの恐慌論(下)
Author(s)	谷口, 吉彦
Citation	經濟論叢 (1929), 28(2): 256-277
Issue Date	1929-02-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/129712
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 第 二 十 二 卷

昭和四年二月一日發行

論 叢

大 稅 論 法學博士 神戶 正雄

總合社會學概念 文學博士 米田庄太郎

財產生命保險 經濟學博士 小島昌太郎

明治初年に於ける大阪爲替會社 經濟學士 菅野和太郎

リカアドウの恐慌論 經濟學士 谷口 吉彦

時 論

我國の國富及び國民所得を論ず 經濟學博士 汐見 三郎

說 苑

經濟政策學に於ける超越的目標に就いて 經濟學士 藤田 敬三

豫算に依る企業の統制 經濟學士 大塚 一郎

雜 錄

獨逸に於ける中央地方稅の發達 經濟學士 中川與之助

美濃稻津村小里の割山制度 經濟學士 井 篁 弁

リカアドウの恐慌論 (下)

谷 口 吉 彦

八、資本の蓄積と生産の制限

リカアドウの恐慌論は、資本の蓄積と利潤率との關係に關する問題として研究さるゝに至りしこと、既に述べ來れる所である。資本が蓄積され、擴張再生産が進行するにつれて、勞働に對する需要を増加する故に、限界耕作を低下し、食料生産の困難を加へる。従つて勞賃は遞増傾向をとり、その結果として利潤率は遞減せざるを得ない。然るに此の傾向が極限にまで進んで、勞賃は利潤を喰ひ盡し、生産物の全部がすべて勞賃に歸する場合には、資本の蓄積は其の動機を失ふから、蓄積は停止し、勞働需要は増加せず、従つて人口は其の頂點に停頓せねばならぬ。『勞働が農業家（企業家）の全收得額に達するや否や、蓄積は終りを告げねばならぬ。』¹⁾此の場合には『如何なる資本も、何等の利潤をも生むことが出來ず、そして何等の追加勞働も需要され得ず、その結果として人口は頂點に達してゐるであらう。』²⁾此の如き狀態——勞賃極大、利潤皆無、蓄積停

1) D. Ricardo; Principles p. 99. (堀氏譯本一二三頁)

2) ibid., p. 99. (同上一二三頁)

止、人口停頓——は極限的理想の靜止狀態であり、此種の狀態を假想することは、又古典學派に共通の一思想である。『人は青年より壯年となり、次いで老衰し死亡する。併しこれは國民の進路ではない。最も強盛なる狀態に達するならば、それより以上の進歩はなるほど阻止される。が併しその自然的傾向は、幾多の時代に亘り引續いて其の富及び人口を減少せずに維持するにある。』³⁾

併し乍らリカアドウによれば、此の如き擴張再生産の極限的停止は、現實に於ては、利潤の極限的消失よりも遙かに以前に到來せねばならぬ。『實は、かゝる時期の來るよりも遙かに、利潤の甚だ低き率は、總ての蓄積を抑制してゐるであらう。』⁴⁾何となれば、『蓄積に對する彼等（企業家）の動機は、利潤の減少する毎に減少するであらうし、彼等の利潤が餘りに低くなつて、彼等の勞苦に對して、並びに彼等がその資本を生産的に使用する場合に必然的に遭遇すべき危險に對して、相當の報酬を彼等に與へない時には、全く停止するであらう。』⁵⁾それ故に利潤率遞減の現實の極限は、此の報償程度にある。利潤がこの報償程度を割る瞬間に、蓄積は停止し、人口は停頓し、勞賃は生産物の全部に達せずして既に停止する。是れ即ちリカアドウに於ける現實の極限的靜止狀態又は理想狀態である。

3) *ibid.*, p. 251. (同上二八五頁)

4) *ibid.*, p. 99. (同上一二三頁)

5) *ibid.*, p. 100-101. (同上二五頁)

生産の制限——資本の蓄積即ち擴張再生産に對する制限は、以上述ぶる所の利潤率の遞減より以外には、何物も存在しないといふのが、リカアドウの恐慌否定の骨子である。『必要品の騰貴の結果として勞賃が騰貴し、其の結果、資本の利潤としては殆んど何ものも残らず、ために蓄積の動機がなくなる程度に達するまでは、生産的に使用され得ざる如何なる分量の資本も、一國に於て蓄積さるゝことは出来ない』⁶⁾といひ、また『資本が何等かの利潤を生んでゐる間は、資本の使用には制限がない』⁷⁾と言ふ。

然らば、此の『資本の使用には制限がない』といふこと、即ち生産制限の否定は、リカアドウに於て如何にして證明さるか？

第一に彼れに従へば、物の生産は其の性質上より必然に消費を意味し、従つて生産と消費とは必然に適合せねばならぬ。之を自己生産に就て言へば、『何人も消費又は販賣の目的なしには生産せず、また直接彼れにとつて有益なるか又は將來の生産に役立つか何れかの他の商品を購入する意圖なしには、彼れは決して販賣しない。そこで彼れは、生産することによつて、必然的に、彼れ自身の財の消費者となるか、若くは或る他人の財の購買者及び消費者となる。』⁸⁾之を資本家的生産に就て見るも、『若しも彼れが其の一萬磅を生産的に使用したとすれば、彼れの有效需要は、新たな勞働者を仕事に就かしむべき食物、衣服及び原料に向ふべく、』⁹⁾従つて是等のものゝ消

6) *ibid.*, p. 274. (同上三一三頁)

7) *ibid.*, p. 280. (同上三一四頁)

8) *ibid.*, p. 273. (同上三一三頁)

9) *ibid.*, p. 274-275. (同上三一四頁)

費が其處になければならぬ。

それ故に資本の蓄積——生産の擴張は、必然に消費の擴張を伴ひ、消費の擴張は必然に需要の擴張を意味する。従つて『需要はたゞ生産によつて制限さるゝに過ぎず』⁽¹⁰⁾『有效需要は生産に依存する』⁽¹¹⁾生産は需要を作り出し、需要は生産を作り出すから、結局に於て、生産はたゞ生産によつてのみ——利潤率の遞減によつてのみ——制限さるゝに過ぎず、生産はたゞ生産のために行はれ、未來永劫に亘つて繼續さるゝこととなる。

第二に彼れに従へば、商品の流通は其の性質上より、需要と供給との必然的適合を意味する。リカアドウに従へば、『生産物は常に生産物によつて、若くは勤勞によつて購買される。貨幣はそれによつて交換を行ふ所の單なる媒介物に過ぎない』⁽¹²⁾一定の貨幣を以つて甲商品を購入せんとする需要も、此の貨幣そのものは乙商品の供給によつて得られたものであるから、甲に對する需要は、その反面に乙の供給を豫想し、従つて前者に對する需要は、後者の供給に一致する。又一定の貨幣を得んとする乙商品の供給は、此の貨幣を以つて甲商品が必要せんとするものであるから、乙の供給は甲に對する需要を意味し、前者の供給は後者の需要と一致せねばならぬ。此の場合に甲商品を購入するものは、直接には貨幣であるが、結局は乙商品であり、従つて一商品の存在する所、常に他の商品に對する需要がなければならぬ。『生産されたるあらゆる物にとつて其

- 10) Letters of Ricardo to Trower and others 1811-1823 (edited by J. Bonar 1899.) p. 128.
11) Letters of Ricardo to McCulloch 1816-1823 (edited by J. H. Hollander 1895) p. 79.
12) Ricardo; Principles, p. 275. (同上三一五頁)

の所有者がなければならぬ。雇主か地主か労働者か、何れが所有主たるにせよ、一の商品は必然に需要者である。¹³⁾」

此の如くしてリカアドウに於ては、貨幣經濟も信用經濟も結局に於ては、物々交換に歸する。かくて社會的生産物の全體に就て見る時は、需要は供給を意味し供給は需要を意味することゝなつて、兩者は全體として完全に一致し、『賣手と買手との形而上學的均衡』¹⁴⁾が存在する。従つて供給は需要によつて制限さるゝこともなく、また供給は需要を超過することもなく、永久に兩者の平衡狀態が維持さるゝと言ふ。

九、一般的恐慌と部分的恐慌

資本主義經濟組織を物々交換にまで還元することによつて、一般的生産過剰は容易に否定される。蓋し物と物とが交換さるゝ以上、そして交換を目的とする種々の物が生産されてゐる以上、總ての物が同時に一樣に交換の相手物を發見し得ざるが如き一般的生産過剰は考へ得られないからである。たゞ個々の商品に就て見る時は、特種の商品が過剰に生産されて相手物を發見し得ざることにはあり得るであらう。『特定の商品が餘りに多量に生産せられ、之に費した資本を償ふに足らぬ程の供給過多が市場に起るかも知れぬ。が併し此のことは、總ての商品に關して起り得な

13) D. Ricardo; Notes on Malthus (edited by J. H. Hollander and T. E. Gregory, 1928) p. 160.

14) K. Marx: Theorien über den Mehrmert, II. Bd. II Teil (1921) S. 264.
鳥海鳩助譯 資本蓄積と恐慌 (大正十五年) 五七頁

い』のである。

此の如き特定商品に於ける生産過剰即ち部分的生産過剰も、併し乍ら永續的に存在し得るものではなく、常に一時的にのみ起り得るに過ぎない。何故かと言ふに、『如何なる方法で資本を使用すべきかは、常に自由選擇の事柄であり、従つて或る一定の期間に亘つて、何れかの商品の過剰が存在するが如きことはあり得ない。何となれば、今もし其處に過剰があつたとすれば、其の物は其の自然價格以下に下落し、かくて資本は、他のより有利な用途へ移り行くであらうから。』即ち自由競争による自然的調節の結果として、各生産部門の間に於ける生産力の比例關係——『資本の最も有利なる分配』³⁾——は、一時的には攪亂されつゝも、常に平衡状態を回復するといふ古典學派共通の思想が、此處にも重要な役割を演じてゐるのを見る。

併し乍ら此の種の平衡状態の回復は、必ずしも圓滑に行はるゝものにあらず、常に多少の衝動を免れないから、此處に一時的な混亂を見ることゝなるが、此種の一時的部分的恐慌は、その性質上より、平衡状態回復の難易に従つて、恐慌の影響乃至害惡の程度を異にする。『此の困難の期間は、多くの人々が、長い間慣れてゐた彼等の資本の使用を放棄する場合に感ずる嫌忌の強弱に應じて、延長され若くは短縮されるであらう。』⁴⁾のみならず寧ろそれよりも、此の困難は、平衡状態回復の條件としての資本移動の難易によつて其の程度を異にする。そして資本移動の難

- 1) D. Ricardo; Principles, p. 275. (同上三一五頁)
- 2) ibid., p. 275 note (同上三一五頁)
- 3) ibid., p. 252. (同上二八七頁)
- 4) ibid., p. 250. (同上二八五頁)

易は主として資本構成の如何に依存し、固定資本の比例的増大と共に其の困難を加へる。『資本の用ひらるゝ或る事業から、流動資本を引き去ることは、それより固定資本を引き去る程には困難でない。一物の製造のために建てられたる機械を、他物の製造に向けることは屢々不可能である。が一事業に於ける労働者の衣食住は、他の事業に於ける労働者の維持に充てることが出来る。即ち同一の労働者は、彼れの仕事は變化しても、同一の衣食住を受けることが出来る』からである。それ故に、『大資本が機械に投資されてゐる所の富裕にして強大な諸國に於ては、比較的少量の資本が固定資本に比較的多量の資本が流動資本に存する所の貧弱なる諸國に於けるよりも、産業の激變によつてより大なる困難を経験する。……併し乍ら此のことは、富裕な國民の甘受せねばならぬ一種の禍であつて、之に就て不平をいふことは、恰も一人の富裕な商人が、彼れの船は海難の危険に曝されてゐるのに、貧しき彼れの隣人の小屋は總てのかゝる危険を免れてゐると不平を言ふのと同じく、不合理であらう。』⁵⁾

デイトレス

部分的恐慌に伴ふ困難は、彼れに従ふも、資本主義の發展と共に其の程度を加へねばならぬことは、資本構成の高級化の傾向が既にリカアドウに於ても認められてゐることによつて明かであらう。『労働に對する需要は、流動資本の増加に依存し、固定資本のそれには依存しない。是等二種の資本間の比例は、總ての時總ての國に於て同一であるといふことは、……起りさうに

5) *ibid.*, p. 251. (同上二八六頁)6) *ibid.*, p. 251. (同上二八六頁)

もない。技術が發達し文明が擴がるに従つて、固定資本は流動資本に對してより大なる比例を保つやうになる……⁷⁾。併し乍らリカードウが此の資本構成の高級化傾向を明かにせるバアトンの著書を注意したのは、『原論』第三版に至つて初めて挿入された第三十一章『機械に就て』に於てあり、吾々が主として問題とする部分は、第三版に於て殆んど修正されてゐないから、其處では此の問題は勿論重視されてゐない。⁸⁾

一〇、部分的恐慌の原因

然らば此の一時的部分的生産過剰、從つて起る一時的部分的恐慌は、如何にして惹き起さるゝか？ 先づ第一にそれは生産者の『見込違ひ』^{ミスカルユレイション}といふ主觀的原因に歸せらるゝ。『何人か意識的有意的に、自然價格よりも安く賣らるべき商品を生産するとは考へられない。斯様なことが屢々なされることは、私も之を否定しないが、併しかゝる場合それは誤算又は見込違ひから來るものであつて、一年以上も繼續され得るものではない。』¹⁾ としてかゝる個人的過誤は、決して一般的に存在し得るものではない。『誤算をなすかも知れず、また一つ二つ三つ 若くは五十種以上の商品が、其處に存する有効需要よりも多く生産されるかも知れない。』²⁾ 併し乍らそれは常に見込違ひの結果である。それは一つ若くは千の商品に關して起るかも知れない。が併し一時に總てに

7) *ibid.*, p. 387. (同上四三三頁)

8) J. Barton; Observations on the Circumstances which influence to condition of labouring class of Society (1817).

9) 第三版に於ける價值論の修正は、此點を重要なモメントとする。

1) Letters of Ricardo to Trower and others 1811-1823 (edited by J. Bonar

對しては起り得ない』³⁾

第二に部分的生産過剰の原因は又、流行の變遷、租税の新設、戦争の終始、年の豊凶等々の外的事情にも歸せらるゝ。是等の事情は、産業部門の間に存する從來の比例關係を攪亂するから、特定の商品の供給は、或は過剰し或は不足して、茲に部分的生産過剰を生じ、資本の移轉に伴ふ種々の困難を惹起する。此の問題は『産業部門の急激なる變化に就て』と題して、第十九章に於て特に研究さるゝ所である。彼れは此の理論によつて彼れの時代に於ける恐慌、特に一八一五年の恐慌を念頭におきつゝ、之を一般的に説明せんとするものゝ如くである。『長き平和の後の戦争の開始、或は長き戦争の後の平和の開始は、一般に産業上に著しい困難を齎^{ザイストス}す。それは諸國のそれゝの資本が——これまで投資されてゐたその事業の性質をば、大なる程度に變化させるからである。そして新しき事情が最も有利になした地位に資本の落ち付きつゝある間は、多くの固定資本は使用されず、或は全く失はれ、そして勞働者は十分な職を得られない。』⁴⁾

『二、商業國に於ける戦争は、諸國間の通商を阻害するものなるが、少しの生産費を以つて生産し得る諸國から斯かる有利な地位にあらざる他の諸國に向つて、穀物の輸出さるゝことを屢々妨げる。かゝる事情の下にあつては、異常な分量の資本が農業に引き込まれ、これまで輸入國であつた國が、外國の援助から獨立するに至る。……戦争の終結に際しては、輸入に對する種々の

and J. H. Hollander (1899) p. 126.

2) *ibid.*, p. 128.

3) Letters of Ricardo to McCulloch 1816-1823 (edited by J. H. Hollander 1895) p. 78-79.

4) D. Ricardo; Principles, p. 250. (堀氏譯本二八五頁)

妨害が取除かれ、國內の農業家に對する破壊的な競争が始まつて、國內の農業家は、其の資本の大なる部分を犠牲に供するでなければ、此の競争から引き込むことは出来ない………⁵⁾』

『かゝる困難が、戦争より平和への變化と直接に關聯せる場合には、かゝる原因の存在に關する吾々の知識から見て合理的と思はるゝことは、勞働維持のための基金が實質的に減損されたのではなくて、寧ろそれが平生の方向から他に轉向されたのであつて、一時苦しみたる後は、國民は再び繁榮を續けるであらうと信するにある⁶⁾』

最初に述べたる如くリカアドウの經驗した恐慌の多くのものは、戦争の開始、進行、終結と關聯せるものではあるが、彼れが恐慌原因としての此の要素をのみ此の如く強調するは是等の恐慌に對する一面的觀察たるを免れない。のみならず彼れに従へば、是等の恐慌は temporary reverses and contingencies⁷⁾ であり、大なる distress ではあるが、併し『Stagnation (沈滞)』⁸⁾ といふ言葉は、一時的に生産動機の存しない事態に適用するものとしては、適當だとは思はれない。事態の進行中に於て、資本の大なる蓄積のためと、増加した人口に對する食料供給手段の缺乏のために、利潤の極めて低い時には、更に節約せんとする動機は全くなくなるであらう。併し其處には沈滞はないであらう。生産された總てのものは、その公平な相對價格に於て自由に交換されるであらう。確かに沈滞といふ言葉は、かゝる事物の狀態に對して不適當に適用されてゐる。何となれば、一

5) ibid., p. 251-252. (同上二八六頁)

6) ibid., p. 250. (同上二八五頁)

7) ibid., p. 248.

般的供給過剩(General glut)は無いであらうし、また如何なる特定商品も、需要が保證するよりもより大なる分量に於ては、必然的に生産されないであらうから。』⁸⁾

欲望の無根性、——一般的恐慌の否定と部分的恐慌の肯定は又、リカドウに於ては、吾々の欲望の性質からも演繹される。『穀物に對する需要は、之を喰ふべき口數によつて制限され、靴や上衣は是等を纏ふべき人數によつて制限される……一社會又は社會の一部が消費し得る限りの、若くは消費せんと欲する限りの、多量の穀物、多量の帽子・靴は、之を所有し得るかも知れぬ。』⁹⁾従つて生活必要品の生産に就ては、之に對する吾々の欲望に生理的限界の存するといふ事實から、生産過剰は起り得るであらう。

之に反して『諸々の便宜品及び……裝飾品に對する欲望は、限度又は一定の境界を有たない様に見える』¹⁰⁾から、生活必要品に於けるが如き生産過剰は、『あらゆる商品に就て言ひ得るものではない』¹¹⁾『そこで自然は、一定の時に於て農業に有利に用ひらるべき資本額を必然に制限してゐるが、生活の「便宜品及び裝飾品」の生産に用ひらるべき資本額には、何等の制限も附して居らず』¹²⁾これ等の生産は『人間欲望の無限性』¹³⁾に對應して、無限に擴大され得るものである。かくて少くとも奢侈品に關する限りは、生産過剰は起り得べきでない。

8) Letters of Ricardo to Malthus 1810-1823. (edited by J. Bonar, 1887) p. 189-190.

9) D. Ricardo: Principles, p. 275-276. (堀氏譯本三一五——三一六頁)

10) ibid., p. 277. (同上三一七頁)

11) ibid., p. 276. (同上三一六頁)

それ故に『若しもあらゆる人間が贅澤品の使用を止めて、ひたすら蓄積に意を注ぐならば、卽座に消費しきれぬ程の多量の必要品が生産されるであらう。此の如く數に於て限られたる商品に就ては、疑もなく、一般的供給過剰が起り得るし、其の結果として、かゝる商品の追加量に對しては、需要もなく、又より多くの資本の使用に對しては、利潤もないであらう』¹²⁾かくて此の假設の下では、一般的生産過剰は存在し得るかに見える。併し乍ら『此のことを許容したからとて、一般的原理を否認することにはならぬ。例へば英國の如き國に於て、其の國の全資本、全勞働を擧げて必要品の生産にのみ没頭せんとする意向があり得やうとは、想像するだに困難である』¹³⁾として既に其處に必要品以外の生産を許すとせば、一般的生産過剰は必然に否定されねばならぬ。

かくて必要品の生産と奢侈品の生産が併存する現實の社會に於て、部分的生産過剰の起り來る一原因は、是等の欲望に關する生産者の見込違ひに歸せらるゝ。『若しも生産されたる諸商品が、購買者の欲望に適合するならば、是等の商品が市場を發見し得ざる程に過剰に存在し得る筈はない』¹⁴⁾だから現實に特定商品の過剰が存在するとせば、其は生産者の誤算に歸すべきである。『誤算をして欲望に適合せざる商品が生産さるゝかも知れぬ——是等の商品に就ては、其處に供給過剰が起るかも知れぬ。……併し然る時には、此は誤算に據るものであつて、生産物に對する需

12) *ibid.*, p. 278. (同上三一七頁)
13) K. Diehl; Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung (1932). II Bd., S. 415.
14) D. Ricardo; Principles, p. 276. (同上三一六—三一七頁)

要の、欠乏によるものではない。^{15, 17)}」

一 總括及び部分的恐慌説の批判

之を要するにリカアドウの恐慌論は、欲望無限説と、物々交換説と、生産無制限説との三脚の上に鼎立する所の一般的恐慌の否定と部分的恐慌の肯定とから成つてゐる。第一に吾々の消費生活に於ては、必要品に對する欲望には生理的限界を有するから、必要品に關する限りは、生産過剰は起り得るであらうけれども、奢侈品に對する吾々の欲望には制限がないから、これが生産の過剰に陥ることはある筈はない。第二に吾々の流通生活に於ては、商品の購買は、直接には貨幣を以つてするけれども、併し此の貨幣は、他の商品を販賣することによつて得られたものであるから、それは間接には商品を以つて購買したものであり、従つて結局に於ては、商品を以つて商品を購入する所の物々交換に歸する。すでに物々交換たる以上、そして其處に種々の商品が生産されてゐる以上、流通停滯が一般的に起り得る筈はない。たゞ生産者の誤算のために、特殊の商品の過剰又は不足が其處に存在し得るに過ぎない。最後に吾々の生産生活に於ては、言ふまでもなく生産は需要に依存せねばならぬが、併し生産それ自身は需要を作り出す性質を有するから、生産は需要に制限せらるゝことなく繼續され、また擴張され得べく、需要の不足による生産過剰

15) *ibid.*, p. 276-277. (同上三一七頁)

16) D. Ricardo; Notes on Malthus (edited by J. H. Hollander and T. E. Gregory, 1928) p. 160.

17) *ibid.*, p. 160.

は起り得ない。——これが彼れの一般的恐慌の否定論である。

生産者の個人的錯誤は、欲望を豫測する上に誤算を生ずることあるべく、戦争その他の非經濟的事情は、需要の方向を變更せしむることがあるから、特殊の商品または特定の生産部門に於ては、その範圍に限られたる生産過剰を見ることがあるべく、茲に部分的恐慌を發生せしむる。此の部分的恐慌は、生産部門の比例的關係の破壊に基くものであるから、此の比例的均衡の回復——分裂の強制的統一——には、多少の混亂や困難を免れない。そして此の困難は資本構成の高級化するに従つて、ますます其の程度を加へねばならぬ。——これが彼れの部分的恐慌の肯定論である。

そこで吾々は先づ第一に、彼れの部分的恐慌説を検討する。資本主義經濟組織がなほ其の發展の初期にあつた當時に於ては、商品生産の一般化は尙ほ後代の如く十分ならず、従つて此の場合の恐慌が、最も尖鋭化した商品の範圍に限られ、その一般化の十分でなかつたことは、最初に述べたる所により明らかである。彼れの部分的恐慌が、比較的に狭き範圍に限られたる恐慌を意味するに過ぎないならば、それは極めて當然であらう。たゞ既に貨幣經濟より信用經濟に入つて後、久しきを経た當時に於ける部分的恐慌が、單に當該企業若くは當該生産部門の範圍に止まるとなすならば、それは理論上にも事實上にも認むべからざる所である。吾々は曩きに、彼れの經驗し

た最初の恐慌（一九三三年）が、すでに特殊な部門に限らるゝものでなく、各種の生産部門に亘り、商工業より金融業まで包含して、かなりの程度に一般的なものであつたことを確め得たから、以下に於てはたゞ之が理論的吟味を試みるに止める。既に他の機會に私の述べた様に、「貨幣の機能が支拂手段にまで發展すると、」販賣の停滯は、既に約束せる支拂の遂行し得られないことを意味し……支拂手段としての貨幣が作り上げた所の支拂義務の連鎖が破壊され、一點に於ける停滯は、他の總ての點に於ける停滯を續かせる。即ち停滯が一般的となる。」¹⁾ ところで「流信用が販賣停滯を一般的ならしむると言ふのは、個々に對する共通、孤立に對する連鎖を意味するのみであつて、部分に對する全體、狹隘に對する廣汎を意味するものではない。何故かと言ふに、商品販賣が社會的に一般化さるゝことは、資本家社會の成立を前提するからである。資本家社會の以前にあつては……商品賣買は、經濟生活の重要ならざる一部を占むるに過ぎない。従つて此の如き社會に於ける販賣停滯は、一方に於て極めて限られたる範圍に起り得ると同時に、他方に於て其の停滯は絶對的停滯たり得る。それは便不便の問題たり得るにしても、死活の問題たることは出来ない……販賣停滯の起り得る範圍が狭小なる代りに、其の程度が深刻であり、其の行はるゝ限りの全範圍に亘つて「一定の期間、販賣を全く不可能ならしめる」ことが出来る……」²⁾

かくの如くして次第に質的ならびに量的的發展を遂げて來た恐慌が、資本家社會に入るに及ん

- 1) R. Hilferding; Das Finanzkapital, (1923) a. a. O. S. 298. 林要譯; 金融資本論 (昭和二年) 四八二頁
- 2) 拙稿; ヒルファディングの『恐慌』の意義に就て (經濟論叢第二十一卷第六號 大正十四年十二月。一五一頁)
- 3) R. Hilferding; a. a. O. S. 360. (林氏譯本五八七頁)

で、更に飛躍的な質量的發展を遂げたことは寔に當然である。そしてリカアドウの經驗した數次の恐慌は、既に吾々の明らかにし得た様に、正に此の飛躍的發展を遂げつゝある過渡的のものであつた。それ等が固有の意味に於ける部分的恐慌であり得ないことは明らかであらう。たゞ彼れの部分的恐慌説に於て注意すべき一事は、彼れが當時の俗論に迷はざるゝことなく、其の原因をどこまでも生産關係に求め、生産均衡の部分的破壊を看破せることである。ベルグマンが評して『販賣停滯となつて表面に表れ来る國民經濟の停滯を、専ら生産部面からのみ導き出さんとする見解の特徵的表現』と言へるは即ち是である。吾々は茲に一面的ではあるが、併し鋭い彼れの洞徹した觀察を認めねばならぬ。

一二 欲望無限説、物々交換説、生産無制限説 の批判

彼れの一般恐慌否定の第一の鼎足、欲望無限説を檢討する。假りに必要品と奢侈品との欲望に相違あるを認め、必要品に對する欲望の有限性、奢侈品に對する欲望の無限性を認めたとしても、このことから、必要品の生産過剰を肯定し、奢侈品のそれを否定することが出来るかどうか？いま必要品の生産過剰——販賣停滯は、或る程度に發展した經濟組織に於ては、決して其の範圍

- 4) 拙稿：同前一五——一五二頁
5) N. Bucharin: Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals (1926) S. 75-77. 友岡久雄譯：帝國主義と資本の蓄積（昭和二年）一五七一—一六一頁
6) E. Bergmann: Geschichte der nationalökonomischen Krisentheorien

に止り得るものにあらず、次第に他の生産部門（例へば奢侈品）にまで一般化するに至るべきことに就ては、既に述べ來れる所であるから、此の點は姑く措き、奢侈品に關する生産過剰は起り得ないかどうか？ 此の點に關して、吾々は先づ『生産過剰』の意味を考へねばならぬ。リカアドウが茲に欲望無限説に基いて否定する生産過剰又は供給過剰とは、既に述べたる所より明らかなる如く、常に吾々の欲望に比較して過剰なる生産又は供給を意味する。然し乍ら此種の絶對的な生産過剰は、現實に於ては、必要品の生産に於てさへあり得べからざることは、例へば食物に對する貯藏欲望に徴して明らかであらう。それ故に吾々が生産過剰といふ場合には、常に需要に比較して過剰なる生産、即ち其の社會の生産條件の下に、生産を繼續せしめるだけの價格に於て、その生産物を購買し得る程度を超えて生産供給せらるゝ場合に限られてゐる。『商品の過剰は常に相對的である。換言せば、一定の價格に於ける過剰である』¹⁾から、此點に於て、『生産過剰に關する彼れの觀念は、之を絶對的、欲望と對立させる程に、粗雑であつた様に見える』²⁾といふ非難を免れない。固よりリカアドウと雖も、欲望と需要との區別は、一般的には之を認むるものである。例へば『人が或る熱望せる満足を得られない間は、彼れは多くの貨物に對して需要を有つてあらう。そして彼れが其等と引換へに提供すべき或る新なる價值を有する間は、それは有效需要であらう』³⁾と言ひ又、『それに對して何人も支拂手段を有たない所のもの、即ちそれに對して需要のな

(1895) S. 93-94.

1) K. Marx; Theorien über den Mehrwert, II. Band, II Teil, S. 293.

島海篤助譯；資本著論と恐慌（大正十五年）一〇八頁

2) E. von Bergmann; Geschichte der Nationalökonomischen Krisentheorien (1895) S. 92.

いものは、生産されなくなる』³⁾といふ。たゞ惜しむらくは、彼れが生産過剰と對立せしむる場合には、此の有効需要を以てせずして、常に單なる欲望を以つてし、かくて後代の消費不足説を茲に發展せしむる餘地が残さるゝことゝなつた。

第二の鼎足、物々交換説を批判する。資本主義經濟から、賣買の媒介をなす貨幣及び信用を捨象し、之を物々交換にまで還元する時は、一般的恐慌の成立し得ざることは明らかである。併し乍らこれによつてリカアドウの證明し得る所は、たゞ物々交換時代に於て一般的恐慌の存在し得ざりしことを證明するに止まり、今日の社會とは何等交渉なきことは明らかである。のみならず物々交換時代に於ては、交換經濟は寧ろ一の偶然的現象に過ぎず、經濟生活の重要な部分は、自給生産によつて營まるゝものであるから、かゝる時代に於ては、所謂部分的恐慌をも見ることは出来ないであらう。交換經濟の占むる場面の擴大すると共に、商品の貨幣への轉化が行はれ、先づ流通手段としての貨幣が成立すると、此の時に初めて恐慌の最初の可能性が成立する。之に就て私は嘗て述べた。『販賣停滯の起り得る一の可能性は、販賣の存在——即ち貨幣の存在——にある。販賣停滯なくして販賣はあり得るけれども、販賣のない所に販賣停滯はあり得ないから、販賣は販賣停滯の起り得る可能的基礎であり、條件である。これヒルファデイングがマルクスに従つて、「恐慌の一般的可能性は、商品が、商品及び貨幣といふ二重物たると同時に與へ

3) N. Bucharin; a. a. O. S. 77-78. (友岡氏譯本一六——一六二頁)
4) D. Ricardo; Principles, p. 274. (堀氏譯本三二四頁)
5) ibid., p. 382. (同上四二八頁)

られる」⁶⁾となす所以である。貨幣の發生は、貨幣の貯藏を可能ならしめる。貨幣の貯藏は購買の停滯であり、從つて販賣の停滯を意味する。……貨幣發生の當初に於て、それが單に流通手段としてのみ働いた時代に於ては、貨幣を珍重し之を一の財寶として貯藏せんとする個人的な個々の欲望でも、既によく販賣停滯を現實に出現せしむるであらう。かくの如き主觀的な個々の個人的欲望を原因とし、貨幣貯藏の過程をとつて實現する販賣停滯は「たゞ一の個々に孤立したる出來事」⁷⁾であり、「一商品の販賣停滯は、一の一般的な販賣停滯を意味しない」⁸⁾のである」⁹⁾と。此の個々の部分的恐慌が如何にして一般的恐慌に轉化するかは、既に明らかにした所である。それ故に

リカアドウの物々交換説は、今日の社會に於ける生産過剰——販賣停滯を否定せんとして、販賣なき社會を拉し來れるもの、販賣なき社會に販賣停滯なきことは自明であらう。

第三の鼎足、生産無制限説を見る。此の説の根據となれるリカアドウの蓄積論は、スミスと同じく生産手段を看過若くは輕視する¹⁰⁾彼れに従へば、「収入が貯へられて資本に加へられると吾々が言ふ時、吾々の意味する所は、資本に追加されと言はれる収入のその部分が、不生産的勞働者によつてではなく、生産的勞働者によつて消費されるといふことなのである」¹²⁾即ち彼れに於ける問題は、収入の資本への轉化部分が、生産的勞働者によつて消費さるゝか、不生産的勞働者によつて消費さるゝかに過ぎない¹³⁾。今若し、生産的にせよ不生産的にせよ、収入の資本への轉化部

6) R. Hilferding; Das Finanzkapital (1923) S. 297. (林氏譯本四八一頁)

7) a. a. O. S. 297. (同上 八二頁)

8) a. a. O. S. 297. (同上 四八二頁)

9) 抽稿; ヒルファディングの『恐慌』の意義に就て(經濟論叢 第二十一卷第六號、大正十四年十二月九五二——九五三頁)

分が、總て勞働者の維持に向けらるゝならば、生産の擴張は、直接に之に比例する消費及び需要を作り出すであらう。然るに現實に於ては、蓄積資本は、第一に工場・機械等の固定資本へ、第二に原料・補助材料等の流動資本へ、第三に勞働者の新たな備入れに分割されねばならぬから、直接に勞働者の維持に向けらるゝ蓄積部分は、蓄積資本の一部分に過ぎない。のみならず此の部分は、資本構成の高級化と共に、相對的には減少する傾向にある。それ故に彼れの如く「資本の蓄積とは、可變資本の蓄積と同様に、収入を勞賃に轉化することのやうに見做す見解は、初めから間違つてゐる。即ち一面的である」¹⁴⁾といふ批評を免れ得ない。たゞ併しリカアドウと雖も、直接の資本への轉化が間接に勞働需要を喚起することは注意する所であり、¹⁵⁾殊に後に至つては明瞭に、「資本の各増大と共に、其のより大なる部分が機械に使用される。勞働に對する需要は、資本の増加と共に引續き増加するであらう、が併し資本の増加に比例してゐない。その比率は、必然的に一の遞減的比率であらう」¹⁶⁾といふ。此の考へは、資本構成の高級化傾向と共に、リカアドウの比較的後期——恐らくは第二版（一八八九年）と第三版（一八二一年）との間——に至つて到達したるものゝ如く、且つ蓄積論の上には極めて重要なものであるから、若し彼れが此の考へを以つて今一度彼れの蓄積論を振り返つたならば、即ち具體的には第三版に挿入された第三十一章「機械に就て」の所論と調和する様に、第二十一章を書き改める餘裕があつたならば、彼れの蓄積論從つ

10) 拙稿：スミスの價格論と分配論（經濟論叢第十八卷第一號、大正十三年一月参照）

11) M. Tugan-Baranowsky; Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England (1901) S. 20, S. 26.

12) D. Ricardo; Principles, p. 132. (堀氏譯本一六〇頁)

て恐慌論は、或は多少其の内容を變更するに至つたかも知れない。此の修正は彼れ自身も之を豫想し、且つ之を希望しつゝあつたと思はるゝ理由がある。一八二一年一月二十五日附マカロツクに宛てた彼れの手紙には、『第三版を印刷する目的で、今現に印刷屋の手に渡つてゐる私の前著に於ける蓄積に關する章は、同じ理由(時間がないこと)から之を書き直すことが出来なからうと思ふ。併し若し此の章へ来るまでに、私に時間があり、且つ之を改善するに足る能力のあることを發見したら、私は之を試みずには措かぬであらう』¹⁷⁾とある。何れにせよ、彼れの蓄積論は尙ほ幼稚であり、之を前提とした生産無制限説も亦、之を今日の理論より見れば、到底批判に堪ふべくもない様に思はるゝ。

以上述ぶるが如く、彼れの恐慌論ごとに其の一般的恐慌の否定論には、承認し難き多くの難點を有する。然らば是等の難點は何に山來するか？ 第一に吾々は、何人も免れ能はざる自己の社會的存在より來る必然の制約を認めねばならぬ。彼れの經驗せる多くの恐慌は、其後に於けるそれの如く明瞭なる近世的形態に於て現はれたるものではない。彼れも亦、彼れ自身の經驗から自由なることの出来なかつたのは當然であらう。併し乍ら第二に、彼れをして特に是等の恐慌事實に對する一面的觀察に終始せしめた責任の一半は、彼れの認識乃至研究方法に歸せらるべきであらう。固より彼れの抽象的演繹方法は、一部の批評家によりて非難せらるゝが如き空虚な獨斷的假設ではなく、具體的な歸納的觀察が其の基底を流るゝことには異存はないけれども、併し彼れ

- 13) D. Ricardo ; Notes on Ma'thus (edited by J. H. Hollander and T. E. Gregory 1928) p. 174.
14) K. Marx ; Theorien über der Mehrmert II. Bd., II. Teil, S. 233. (島海氏譯本二頁)
15) D. Ricardo ; Principles, p. 274-275. (堀氏譯本三一四頁)

自身も言へるが如く、彼れの『目的は諸原理を説明する』にあつて、具體的な個々の問題に關せざるは勿論、此の原理の實際的適用も亦、彼れの直接な意圖から除外されてゐる。それはどこまでも一般論であり、従つて抽象論たらざるを得ない。幸に彼れの一般的抽象論は、後代の多くの經濟學者の陥つた缺陷——靜的抽象論——を免れて、常にその考察を動的變化にまで進めてゐる點は異とするに足るけれども、而も此の動感研究は常に『諸原理』に制約されて抽象的であり、現實の運動を離れた『一般的傾向』の探究である。此の一般的傾向が、現實の運動に於て如何に歪曲されつゝ進展するかを觀る所に、恐慌乃至景氣變動論の存在を許さるのであるが、此の現實運動の研究は、彼れに於ては、具體的な個々の問題の説明と見られ、諸原理の適用論と考へらるゝが故に、本來は彼れの思惟過程の本筋には入り來らざる筈である。彼れは一方に此のことをよく意識し乍ら、他方に自らこの制約を破つて、『資本の現實の運動』を説明せんとし、一般的恐慌を否定せんとする。彼れの破綻は多く此の點に基くものゝ様である。

最後に、吾々は決して恐慌論史に於けるリカアドウの意義を沒却せんとするものではない。總て問題の絶對的解決は、之を何人にも求むべからざるものである以上、思想史の發展に於ける重要は、問題の解決ではなくて寧ろ問題の提出でなければならぬ。價值論史に於けるリカアドウと同じく、恐慌論史に於けるリカアドウの意義も亦、學問問題の提出に之を認めらるべきであり、然る限りに於て、彼れの恐慌論は存在の理由を有したものであり、また現に有するものである。

(完)

16) *ibid.*, p. 387. (同上 四三三頁)

17) *Letters of Ricardo to Mc Culloch 1816-1813*. (edited by J. H. Hollander 1895) p. 94.